
平成22年度 土木学会全国大会報告

CONTENTS

1. 総括報告	橋詰 知喜	ii
2. 特別講演会	高橋 清	iii
3. 全体討論会	高野 伸栄	iv
4. 第65回年次学術講演会	渡部 靖憲	v
5. 研究討論会	古内 仁	x
6. パネル展示	川村 力	xi
7. 交流会	高松 康廣	xi
8. 土木学会百周年記念事業キックオフ討論会	藤井 聡	xi
9. 映画会	柁山 清人	xii
10. 国際関連行事報告	加々美 修一	xiii
11. 実行委員会組織図・委員会名簿	橋詰 知喜	xiv
12. 平成23年度全国大会の紹介	四国支部	xviii

1. 総括報告

土木学会 平成22年度全国大会(第65回)を終えて

はじめに

平成22年度全国大会(第65回)は、2010年9月1日(水)～3日(金)の三日間、北海道大学札幌キャンパスにおいて開催された。大会は、9月の北海道には似合わない厳しい暑さの中、のべ約25,000人の参加者を得た。

総括報告にあたり、まず最初に第64回全国大会実行委員会各位に心から御礼を申しあげたい。西部大会において見、聞き得た情報の数々が、本大会の諸準備と運営にどれほど役立ったか、計り知れない。

各行事の詳細は各報告に因ることとし、ここでは大会の企画運営に関する検討経緯等を簡単にお話したい。

65回大会の新たな試み

大会の企画にあたり、実行委員会幹事会で9回の議論を重ねた。その中から代表的な“新たな試み”を紹介する。

(1) 大会テーマの選択と全体討論会

公共事業縮小論等土木に関する厳しい社会的評価を鑑みて、ここ数年は土木本来の役割や事業の必要性を再認識するテーマが続いていたが、公共事業のみならず、地球環境等人類社会を取り巻く大きな課題に対して今後土木は何が出来るか、またどうあるべきか、人類の歴史を支え、営みをつないできた土木に、未来を見据えた討論を加えることにより、新たな土木を定義したいとの思いから、大会テーマは「土木はつなぐ、“地域”を“生命(いのち)”を、そして未来へ」とした。また、新たな定義のためには従前と異なる幅広い視点から討論を興すため、あえて土木専門外の方々をパネリストに招聘し、話題提供をお願いする等、工夫を加えた。

(2) 大会日程上の工夫

“特別講演会・全体討論会、そして交流会”という全体行事へ参加しやすい“流れ”を作るため、大会2日目の午後は全体行事に集約した。その結果、全体行事には連続して多数の参加を得ることが出来たが、一方で、参加者の聴講しやすさを確保するため行事の併行開催を避けた結果、研究討論会行事が3日午後ヘシフトとなり、最終日の終了

時間が遅くなった。

(3) 普段着の交流会

昨今の交流会はホテルにおけるレセプション形式が定着していたが、参加費用が高額であり、学生を含む若手技術者の参加が少ないことから再検討し、最終的に安価で北海道らしさの演出も加わるジギスカン会場とした。参加費用も例年の半額とし終了時間も19時台に設定したところ、大学単位での参加など予定数を大幅に超える申込みとなり、盛況のうちに終了した。評価や是非は大会日程の試みと合わせ、アンケート結果等に委ねたい。

(4) 音楽会の開催

歴史を超えて人々の心をつないできたクラシック音楽会を開催した。全国大会に花を添え、さわやかなアクセントを与える音楽会。パイプオルガンコンサートは著名な演奏家をお迎えできたこともあり、立ち見の盛況となった。アンサンブルシビルにも多くの方が参加し、名演奏に酔いしれた。

(5) 受付テントの大型化

西部大会での総合受付の在り方を参考に、広く空間を確保するため屋外テントの大型化を行った。結果として強い日差しや降雨を避けることが出来、スタッフ環境の改善にもつながった。

課題

いかに有意義で心地よい大会とするか、参加者の立場で検討を重ねたが、課題もある。

(1) プログラムの並列開催

本大会では、一部行事について調整が遅れ、プログラム編成に配慮できず、百周年キックオフ討論会が併行開催となり、参加者の選択を二分する結果となった。

(2) 熱さ対策

大会初日の最高気温は31.2℃(同日の平均最高気温24℃)まで上昇した。空調機能が無い会場もあり、直前に扇風機等の手配をしたが十分な台数を確保出来ず、不快感を解消できなかった。



大会会場①(高等教育機能開発総合センター)



総合受付(大型テント)



大会本部(ミーティング)

表1 全国大会で実施した行事一覧

行事名	会場	入場者数等
年次学術講演会	北海道大学札幌キャンパス	講演件数：3,627題 延べ参加者数：17,939名
研究討論会		講演数24題 延べ参加者数：1,701名
特別講演会		554名
全体討論会		405名
国際関連行事		83名
映画会		411名
百周年記念キックオフ討論会		293名
交流会	札幌ビール園 ポプラ館2階	487名
パネル展示	JR札幌駅 西口コンコース イベント広場	3,007名
合計		24,880名



阪田会長総括記者会見

おわりに

最終日、大会の総括会見には10社11人の大勢の報道機関が集まり、阪田会長より大会内容や意義について報告が行われた。思えば2009年1月の実行委員会準備会発足以来、多くの関係者の知恵と力の結集が実を結び、予定された行事が無事に終了したことは大きな喜びである。特に(株)JR北海道様からは駅構内への横断幕設置等、

数々の特別なご配慮を頂戴した。この場をお借りして心から御礼を申し上げます。

“土木はつなぐ”をキーワードに進めてきた65回大会だったが、学会本部・支部・実行委員会スタッフそれぞれの想いが3日間の大会運営をつないだものと思う。すべてのみなさま方に心から御礼を申し上げ、土木の未来を四国大会につなぎたい。(総務班長 橋詰 知喜)

2. 特別講演会

コンプライアンス推進としての社会基盤整備

～講師 土木学会会長 阪田 憲次～

平成22年9月2日(木) 13:30～14:30

北海道大学クラーク会館講堂

土木学会全国大会第2日目の9月2日に、北海道大学クラーク会館において、「コンプライアンス推進としての社会基盤整備」と題し、阪田土木学会会長より特別講演を頂いた。

当日は、ある程度の余裕を見込んで会場を設定していたが、入場者数が554名と、座席に着けない聴講者が多数出るほど非常に盛況であった。

講演の中で阪田会長は、わが国が目指す「持続可能な社会」の構築のためには、活発な社会活動及び経済活動を支える「社会基盤整備」が不可欠で、この社会的要請への対応は「広義のコンプライアンス」の推進であるとの観点から、社会基盤整備の意義について論じられた。

まず、「持続可能な社会」の構築における四つの課題として、①少子高齢化、②東アジア諸国との国際関係、③地球温暖化対策、④社会基盤の老朽化を指摘し、次に社会基盤整備の推進から見た、課題解決のあり方について論じられた。

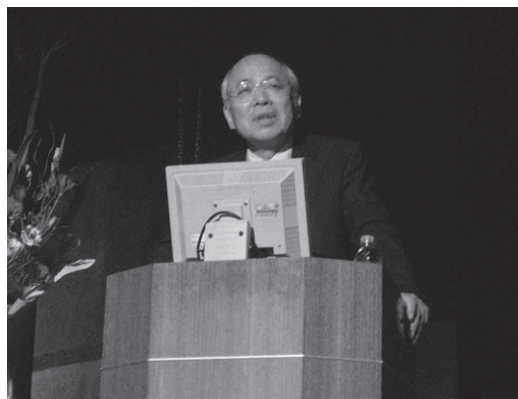
「少子高齢化」については、「少子高齢化」に伴って国内市場経済の縮小が予想される中、「海外市場開拓」、「シニアエンジニアの活用」、「技術者教育改善」が必要であることを示された。

「東アジア諸国との国際関係」では、経済的相互依存や人的・物的交流が深まる中、国際経済社会競争に負けないように、空港・港湾等の社会基盤整備の推進について言及された。

「地球温暖化対策」では、二酸化炭素排出削減と同時に、異常気

象に対する社会基盤整備も必要であり、それらの施設整備における土木技術の重要性を訴えた。

「社会基盤の老朽化」では、パット・チョート氏が著した「荒廃するアメリカ」を引用し、現在の日本の「社会基盤の老朽化」の危機的状況を指摘し、社会基盤の予防的な維持補修の重要性を訴えた。さらに、社会基盤の老朽化に対して迅速に対応した米国の事例を紹介し、日本も予防的な維持補修に早急に取り組むべきとし、そのためのマネジメントの方向性について示された。(特別講演班長 高橋 清)



阪田会長特別講演会(クラーク会館)

3. 全体討論会

土木はつなぐ、“地域”を、“生命(いのち)”を、そして“未来”へ

平成22年9月2日(木)14:45～16:45

北海道大学クラーク会館講堂

全体会討論会では、メインテーマを「土木はつなぐ、“地域”を、“生命(いのち)”を、そして“未来”へ」とし、“地域”、“農業と都市”、“地球環境”、“開発途上国”、“女性”、さらに“持続可能性”という今後の土木にとって、極めて重要と思われる分野の最前線で活躍されている以下のパネリストを招き、議論を行った。本討論会においては、中辻隆特別講演会討論会部会長の発案により、インターネット会議システムを用いて、バンコクにあるアジア工科大学から、リアルタイムの画像・音声により、話題提供がなされるとともに、会場での議論に際しては、質問用紙に加え、ツイッターを用いての意見収集も行われ、将来に向けた新しい試みが行われた。

- コーディネーター：佐々木隆生(北海道大学公共政策大学院特任教授)
- パネリスト：桜井あけみ(知床町町議会議員)、林美香子(慶應義塾大学大学院システム・デザイン・マネジメント研究科教授)、松井俊久(NASAゴダード宇宙飛行センター研究員)、東久美子(国立極地研究所准教授)、眞田明子(独立行政法人国際協力機構地球環境部研究員)、加賀屋誠一(北海道大学大学院工学研究院教授)、テレビ会議話題提供者：Kunnawee KANITPONG(アジア工科大学助教授)

討論においては、桜井氏から道路など土木施設と普段の私たちの生活の関わりについて、具体事例を通して述べられ、林氏からは農都共生による経済循環・地域活性化、景観の大切さが、松井氏からは気象分野におけるモデルの紹介がなされた後、これらの結果を有効利用して、地域生活を改善することが土木の役割であるという提言がなされた。さらに、東氏からは南極及びグリーンランドにおける地球温暖化の影響についての研究を踏まえ、急激な気候変動に対す



全体討論会(クラーク会館)

る対策の必要性が、眞田氏からは開発途上国の実践を通して、人々の希望をかなえるインフラ整備を行うという土木技術の本質と原点を忘れないことの重要性が、加賀屋氏からは国土・グローバルな地域づくりの総合工学としての土木の重要性について、述べられた。Kunnawee KANITPONG氏からはアジアにおける女性土木技術者の現状と役割及び問題点についての話題提供がなされた。会場での議論においては「これからのサステナビリティでは予測技術が肝要。様々な環境データを共有化すべき」、「先進国の種々の努力は途上国の人口爆発の中では、徒勞に終わるのではないか」といったツイッターでの意見も含めて、多くの質問・意見が交わされ、予定時間を超える熱い議論が行われた。本全体討論会は学会員自らが進むべき方向を自律的に考える機会とするとともに、2014年の土木学会百周年に向け、次なる100年における土木の役割に関する議論の端緒となったといえる。(全体討論班長 高野 伸栄)



学術講演会

4. 第 65 回年次学術講演会

第65回年次学術講演会は、2010年9月1日(水)～3日(金)の3日間、北海道大学札幌キャンパスにおいて開催された。講演会では例年通り各部門に分かれて学術研究並びに技術報告に対する発表及び討議を通して、土木工学における新たな技術開発や最新の知見、さらに近年指摘されている地球温暖化、気候変動に対する土木工学としての適応、社会の持続性や環境予測に係る研究報告など建設業界を取り巻く新たな対応についても活発な意見交換が行われた。

本大会の講演会会場は、許容人数の関係から、第I、III、IV、VI、VII部門が高等教育機能開発総合センター、第II、V部門が工学部と2つの異なる建物に分かれて配置された。会場が別棟で離れることにより、参加者の混乱が予想されたため、学術講演会本部が設置された高等教育機能開発総合センターとは別に本部と同等の指示機能、対応機能をもつ工学部サテライト本部を設置し、工学部会場の参加者数集計、座長の受付、優秀講演者採点収集だけでなく工学部会場責任者への指示をサテライト本部において行った。学術講演会本部及びサテライト本部から各会場責任者への全ての連絡、指示はトランシーブにて行い、煩雑かつ緊急性の要する連絡、指示が飛び交う事態においても円滑に対応することができた。これによる両本部からの緊密な連絡体制の下、参加者並びに講演会の進行に大きな混乱は生じず、予定通り順調に講演会を進めることができた。

講演会を通して全く予想していなかったのが、開催期間中の猛暑であった。平年は8月半ばを過ぎれば、残暑のない、極めて快適な秋の気候となる札幌であるが、本年度は気温が下がらず、クーラーは一部の部屋にしか設置されていない北海道大学の教室では文字通り異常な熱気に包まれていた。特にクーラーの全くない工学部会場では、参加者は汗だくで議論を行い、急遽手配した扇風機も十分機能せず、参加者にとっては厳しい環境下での講演会となったかもしれない。全ての部門会場の近くに休憩室を配置していたが、クーラーの設置されている休憩室だけは常時満席であった。このような特殊な状況が発生し問題が生じたことを教訓とし、次回大会ではクーラーの有無を含めた会場部屋割り等検討が必要となるであろう。

もう一点残念な事態となったのは、参加者への盗難が発生したことである。対応した警察によると講演会参加者を狙った常習犯の可能性が高いという。学会期間中は、参加者は参加証があるとはいえ、なくても学内会場に入ることは可能であり、一般に学会での盗難は参加者の頭のないケースが多く、危険が伴うことを認識する必要がある。こうしたケースは、次回以降講演会においても発生する可能性は否定で

きないものであり、講演部会としても十分な注意喚起が必要と考える。

今年度の学術講演会の発表研究は、第I部門681件、第II部門320件、第III部門528件、第IV部門376件、第V部門720件、第VI部門540件、第VII部門215件、共通セッション267件であり、合計3647件であった。昨年第64回大会と比べると全ての部門発表件数が増加し、特にV部門は113件の増加となり、合計も昨年度の3311件から336件、約1割の増加となった。学術講演会への延べ参加者数は、表1に示すとおりである。3日間の総延べ数は17939人と昨年の第64回大会(於福岡大学)での16634人、一昨年の第63回大会(於東北大学)の15758人と比べて、それぞれ1305人(8%弱)、2181人(14%弱)増加している。部門別では、微減した第II部門を除き、発表件数と同様に全ての部門において参加者数の増加があり、特に共通セッションでは50%以上の増加となった一方、研究討論会は232人(12%)の減少であった(表2)。これらの異なる傾向が共通セッション並びに研究討論会のテーマの設定に依存したものと考えると、次回以降大会におけるテーマを検討する上で何らかの示唆を与えていると思われる。地域的魅力が高いとされる北海道で開催される年次講演会への参加者はかねてより他の地域より相対的に多いが、平成14年に開催された前北海道大会での延べ参加者数23501人からみると5562人(24%弱)の減少であり、ここ数年間に対する本年度の参加者の増加が年次講演会への関心の高まりを直接示唆していると考えられるのは拙速かもしれない。土木工学を取り巻く厳しい社会情勢を背景に継続している大きな流れの参加者減少傾向の中、今後の年次講演会の位置づけや実施方法を改めて見直し、時代背景に応じて臨機応変に大会運営を考えることも今後必要であろう。しかしながら、本大会において全国から近年で最大数の会員が一堂に会し、活発な議論を通して学術的交流あるいは分野間交流が促進されたことは、土木学会として大いに意義のある大会となったものと考えられる。

優秀講演者表彰制度により認められた優秀講演者を表3に示す。この制度は、優れた講演を行った学生並びに若手研究者・技術者を表彰するものであり、受賞者各位にお祝いを申し上げる。また表彰された優秀講演者に勝るとも劣らない発表を行った講演者並びに積極的な討議に参加頂いた参加者各位に敬意を表す。

最後に、第65回年次学術講演会が多くの参加者を得て、研究発表及び討議を通じた意見交換、学術交流を経て大過なく当初の目的を達成できたのは、学会本部、北海道支部関係各位、全国大会実行委員会、学術部会各位、そして学生スタッフのご尽力の賜物であり、深謝する次第である。(学術講演班長 渡部 靖憲)

表1 年次学術講演会の参加者数比較

	H14年度 (前北海道大会)	H21年度 (西部大会)	H22年度(北海道大会)		対H14	対H21
			各日入場者数	合計		
入場者数	23,501人	16,634人	9月1日(水)	7,286人	17,939人	5,562人減 (23.7%減)
			9月2日(木)	4,198人		
			9月3日(金)	6,455人		
						1,305人増 (7.8%増)

表2 研究討論会の参加者数比較(参考)

	H14年度 (前北海道大会)	H21年度 (西部大会)	H22年度 (北海道大会)	対H14	対H21
入場者数	1,605人	1,933人	1,701人	96人増 (6.0%増)	232人減 (12.0%減)

表3 第65回年次学術講演会優秀講演者一覧

部門	講演番号	会員種別	講演者	勤務先名	講演題目
1	I-008	正	馬越 一也	耐震解析研究所	幅厚比の比較的大きい部材を持つ橋梁全体系の耐震解析モデル化手法の一提案
1	I-027	学	吉塚 公一朗	東京都市大学	橋梁の地震時応答変位による繰り返し桁間衝突に関する解析的検討
1	I-034	学	黒田 千砂子	東北大学	摩擦振子型免震機構を有する橋脚の開発に関する基礎的研究
1	I-050	学	今中 涼平	早稲田大学	抑止杭による側方流動対策に関する研究
1	I-058	正	田中 賢太郎	関東学院大学	制震部材を用いた橋脚基礎設計水平地震力低減法の一検討
1	I-074	正	芳賀 堯	パンフィックコンサルタンツ	補強済み橋脚と未補強橋脚が混在する橋梁の耐震補強設計
1	I-079	正	山口 慎	JR東日本	柱基部に添接部を有する角形断面鋼管柱の耐荷性能について
1	I-085	正	井口 進	日本橋梁建設協会	鋼床版のデッキとUリブ溶接部の局部応力の評価位置に関する解析的検討
1	I-101	学	白井 聡也	法政大学大学院	添え板ボルト締めストップホール法による補修部の疲労強度と破壊起点
1	I-139	学	和泉 遊以	大阪大学	自己相関ロックイン赤外線サーモグラフィ法による実橋梁の疲労き裂検出～ 防食塗装膜および車両走行速度がき裂検出性に与える影響の検討～
1	I-166	学	畑佐 陽祐	岐阜大学	融雪剤散布地域における耐候性鋼橋の腐食環境調査
1	I-182	学	宇都宮一浩	九州大学大学院	大気腐食環境における鋼部材の犠牲陽極防食技術に関する基礎的研究
1	I-190	正	何 興文	北海道大学	交通振動解析を用いる鉄道橋梁健全度評価手法の開発
1	I-194	正	木下 一孝	東日本旅客鉄道	ライナープレート挿入による簡易的な鋼橋長寿命化措置とその効果の検証
1	I-222	学	吉田 直樹	清水建設	中央径間長200m, 400m, 600mを有する低塔斜張橋の終局強度評価とその適用性
1	I-224	正	高久 英彰	東日本高速道路	コンパクト・ノンコンパクト断面区分の判定に関する一考察
1	I-253	学	吉田 守孝	名古屋大学	鋼トラス橋のリダンダンシー解析における衝撃係数に関する研究
1	I-259	正	保木 和弘	構研エンジニアリング	敷砂緩衝材を設置した2/5スケールRC製ロックシェッド模型の重錘落下衝撃実験
1	I-276	学	篠崎 誠	福岡大学	コンクリートの構成則がRCはりの弾塑性衝撃応答性状に及ぼす影響に関する基礎的研究
1	I-279	正	西川 幸成	金沢大学	樹木の幹と枝葉の影響を考慮した落石の運動シミュレーション
1	I-288	学	CHOI Sung-Min	名古屋大学	L形鋼をずれ止めとして用いた合成床版の曲げ載荷試験
1	I-300	正	勝山 真規	TTES	超高強度繊維補強コンクリートを用いた鋼床版急速補強工法
1	I-310	正	石川 裕一	中日本ハイウェイ・エンジニアリング名古屋	疲労と塩害劣化した鋼橋床版の鉄筋腐食の実態と自然電位による評価
1	I-349	学	Pher Errol B. Quinay	東京大学	Simultaneous Multi-scale Inversion Method for Estimating Source Location and Crust Structure
1	I-359	正	佐藤 芳樹	中央復建コンサルタンツ	FE-BE重合要素による微小気泡を含む弾性体の変形解析
1	I-369	正	長谷部 寛	日本大学	中心間隔比3のタンDEM配置正方形角柱まわりの気流測定
1	I-387	学	菊地 由佳	東京大学	台風時の風向特性と複雑地形の増速特性を考慮した風速割増係数の評価手法の提案
1	I-411	正	ハツ元 仁	阪神高速道路	大和川線シールドトンネル部における縦断耐震検討
1	I-436	正	石川 敏之	京都大学	断面欠損を有する鋼板のCFRP板接着補修
1	I-473	正	吉岡 夏樹	駒井鉄工	高力ボルト摩擦接合継手におけるすべり以後の支圧耐力に関する実験的研究
1	I-505	学	中川 康治	首都大学東京	CFCCの高次モードを考慮した減衰自由振動特性に関する実験的研究
1	I-515	正	吉田 善紀	鉄道総合技術研究所	鋼鉄道橋における部材の振動発電を利用したモニタリングシステムの構築
1	I-521	学	伊勢本 遼	京都大学	模型桁車両走行実験における橋梁振動特性推定と異常診断
1	I-534	正	有村 健太郎	土木研究所	腐食損傷の著しい鋼トラス橋における活荷重載荷時の挙動計測
1	I-548	正	二井 伸一	ウエスコ	実験に基づく橋梁上部工への津波外力算定式の一提案
1	I-569	正	武田 篤史	大林組	皿バネボルトセットを用いた摩擦型ダンパーにおける地震時摩擦係数の評価
1	I-583	正	丸山 喜久	千葉大学	地震前後のDSMを用いた新潟県中越沖地震における倒壊建物の抽出
1	I-589	学	野村 謙太	東京都市大学	市街地における震後延焼火災に対する消防能力照査
1	I-597	正	大嶽 公康	日本上下水道設計	浄水場配管の地震時復旧シミュレーション
1	I-606	学	瀬尾 浩幸	山梨大学	車両走行データに基づいた道路段差走行アルゴリズムの開発
1	I-611	学	辰巳 雅俊	京都大学	ネパール・カトマンズにおける歴史的建造物の振動特性の評価
1	I-614	学	全 邦釘	Wayne State University	弾性基礎上の厚肉斜板の曲げ解析手法
1	I-622	学	堀江 佑太	東京都市大学	鋼・コンクリート複合構造高架橋の三角構造体部の応力状態に関するプッシュオーバー解析
1	I-631	正	高橋 弘樹	労働安全衛生総合研究所	偏心荷重を受ける建わくの座屈解析
1	I-637	正	宮崎 靖大	大阪大学	無補剛ステンレス鋼圧縮板の終局強度評価法
1	I-640	正	綿島 敬太	東京建設コンサルタント	階層型意思決定手法に基づくアースダムの簡易な耐震性能評価手法
1	I-650	学	田原 徹也	東京工業大学	観測記録に基づく中央コア型ロックフィルダムの非線形地震応答特性
1	I-670	学	Elif Cagda Kandemir	熊本大学	Seismic Strengthening of Steel Arch Bridge Using Viscous Dampers
2	II-013	学	平野 雄也	日本大学	落下礫の接触時間を用いた粒径推定に関する実験的研究
2	II-058	学	田中 甫幸	北海道大学	札幌の中小河川の歴史とその氾濫特性の変化
2	II-069	学	高石 孟	中央大学	多目的海洋観測ブイを用いた津波警報システムのための音響測深の検証
2	II-077	学	加藤 良平	福井工業高等専門学校	福井県三里浜海岸における高須川河口の変動に関する研究
2	II-110	正	菅原 健司	土木研究所 寒地土木研究所	防波フェンスに作用する波圧特性について
2	II-129	学	阿部 伸弘	北海道大学	暴風場における海からの飛沫生成・輸送過程の計算法の開発
2	II-140	学	遠藤 雅実	東京大学	東京湾湾奥部の微生物群集が底泥酸素消費に与える影響
2	II-151	学	鈴木 達裕	東京理科大学	陸域起源有機物のDO消費特性に関する基礎的実験
2	II-170	正	高山 百合子	大成建設 技術センター	浮遊幼生を対象とした挙動解析手法の検討
2	II-177	学	糠澤 桂	東北大学	透過型・不透過型砂防ダムが存在する山地溪流における底生動物の多様性評価
2	II-183	学	羽石 嵩	室蘭工業大学	釧路湿原における河川流路の改変に伴う植生の変化についての考察
2	II-187	学	大地 洋平	神戸大学	樹木が繁茂した河道区間の高水敷切り下げによる流況変化

部門	講演番号	会員種別	講演者	勤務先名	講演題目
2	II-212	学	浅野 文典	中央大学	安定断面形状を有する流路の掃流砂量に関する研究
2	II-220	正	岡村 誠司	中央大学	洪水流の縦断面水面形変化と準三次元流解析法を用いた石狩川河口部の洪水時の河床変動解析
2	II-225	正	福島 雅紀	土木研究所	面格子法による河床材料調査の精度に関する検討
2	II-227	学	前嶋 達也	中央大学	石礫複断面河道における流れ、縦横断面形状、河床材料分布に及ぼす河道平面形状の影響
2	II-265	学	Noh Seong Jin	京都大学	State Updating and Forecasting of Multiple Hydrologic Models using Sequential Monte Carlo Methods
2	II-270	正	赤松 良久	東京理科大学	河床堆積物の炭素・窒素同位体比に基づく流域環境評価
2	II-280	学	水谷 司	東京大学	漏洩同軸ケーブルを用いたリアルタイム豪雨検知のための人工降雨実験
2	II-291	学	磯貝 二郎	中央大学	屋上貯留による雨水流出抑制効果及び熱環境緩和効果に関する研究
2	II-302	学	藤岡 優子	京都大学	将来気候推計情報を用いた我が国の渇水状況変化の分析
2	II-312	学	糸川 和弘	中央大学	統計学を用いた関東地方の大雨の発生頻度と周期性に関する研究
2	II-319	学	西田 広大	神戸大学	斜面内の降雨浸透および移流分散過程に関する模型実験と数値シミュレーション
3	III-015	学	大久保 佳美	九州大学	2009年7月豪雨による大規模斜面災害発生箇所の斜面災害危険度
3	III-040	正	布川 修	鉄道総合技術研究所	鉄道沿線斜面における落石災害リスクの算出方法
3	III-069	正	荒牧 憲隆	崇城大学	竹炭を混合した干潟土の長期底質改善効果
3	III-094	学	西丸 あずさ	茨城大学	サクシオン低下に伴う不飽和稲城砂の強度変形特性
3	III-100	正	武田 宣孝	北海道電力 京極水力発電所建設所	大規模地下空洞掘削時の岩盤挙動とその対策
3	III-110	正	小早川 博亮	電力中央研究所	未固結地盤の陥没現象に対する室内模型実験
3	III-114	正	熊本 創	大成建設	止水グラウトを考慮した地下水流動モデルのキャリブレーション手法に関する検討
3	III-132	正	下山 顕治	土木研究所	浸透流解析を用いた不飽和軟岩地盤における原位置透水試験の再現解析
3	III-136	学	佐藤 友彦	呉工業高等専門学校	自然堆積粘土における透水係数の異方性に関する研究
3	III-150	正	大川 孝士	土木研究所	堤高100m以上のロックフィルダムの震度係数に関する検討
3	III-167	正	松岡 達也	東亜建設工業	地中内温度がコーン係数に及ぼす影響
3	III-178	正	海老塚 裕明	大林組	移動床土槽実験における弾性波トモグラフィの適用
3	III-190	学	前田 達也	大阪工業大学	土質技能試験結果の評価方法としてz-スコアを用いる際の留意点
3	III-201	学	河野 勝宣	北見工業大学	熱水変質岩の円柱(縦)点載荷強さと一軸圧縮強さとの関係
3	III-209	正	吉川 直孝	労働安全衛生総合研究所	マイクロCTスキャンによる軽石砂の土粒子密度の評価
3	III-230	学	太田 勇希	九州工業大学	混合した産業廃棄物のコーン指数に関する研究
3	III-236	正	福田 淳	前田建設工業	真空圧密工法におけるFEM解析結果の活用事例
3	III-242	学	田 炳坤	京都大学	関西国際空港建設による更新統互層地盤の変形解析-解析モデル-
3	III-250	学	田實 涉	東京大学	締固めた砂礫盛土材料の微小変形特性の静的・動的測定
3	III-261	学	三好 直輔	名城大学	三軸試験ならびに単純せん断試験による東大阪鋭敏粘土の繰返しせん断強度特性
3	III-267	正	小澤 一喜	鹿島建設 技術研究所	覆土を用いた処分場ガスの分解・除去技術の性能評価
3	III-272	正	荒木 豪	ライト工業	エコクレイウォール工法による遮水壁の海水影響と対策(その2)
3	III-286	正	若井 明彦	群馬大学	衝撃力を受けるジオグリッド補強土壁の有限要素解析
3	III-291	正	平川 大貴	防衛大学校	損傷を受けた高分子補強材の変形強度特性
3	III-299	正	磯野 純治	JR東海	プレボーリングモルタルH鋼杭の支持力評価(その3: 曲げ試験による検証)
3	III-318	学	小寺 雅子	京都大学	遠心場ハイブリッド地震応答実験手法の基本的特性に関する一考察
3	III-332	正	堀 智仁	労働安全衛生総合研究所	敷鉄板の荷重分散効果に関する基礎的研究
3	III-358	学	土井 達也	京都大学	遠心模型実験による動的載荷時の不飽和道路盛土の安定性に与える初期含水比の影響
3	III-387	正	富田 雄一	西日本高速道路 四国支社	四国の高速道路における南海地震に対する土構造物の耐震性評価について
3	III-393	正	久保 大輔	前田建設工業	オシログラフを利用した軟弱地盤における砂層位置の推定
3	III-436	正	砂金 伸治	土木研究所	側圧が作用するトンネル覆工の挙動に関する一考察
3	III-450	正	木谷 努	パシフィックコンサルタンツ	多リングシェルを用いたシールドトンネル開口影響についての一考察
3	III-454	学	加藤 盛大	名古屋工業大学	グラウンドアンカーによる山留め支保メカニズム
3	III-459	学	海老根 裕希	茨城大学	気候変動を考慮した液状化による経済損失の評価
3	III-479	正	金沢 智彦	日鐵セメント	極超微粒子注入材による地盤注入工法の開発 - 材料特性 -
3	III-534	正	水谷 崇亮	港湾空港技術研究所	改良済粗粒材の内部構造と力学特性に関する基礎的実験
4	IV-016	正	押田 佳子	日本大学	「流山市グリーンチェーン景観計画」に資する大字の由来より捉えた景観資源に関する研究
4	IV-025	学	青木 忠尚	日本大学	緑化景観評価における構造物視率・空視率を加味した評価の検討
4	IV-027	学	畠山 修一	山梨大学	地域特性を反映させた家具固定化を推進するための啓発ビデオの作成
4	IV-062	学	三井 良太	東京都市大学	共生社会の実現と地域整備-総合社会指標の試み-
4	IV-083	学	下田 興史郎	北海道大学	子育て世代における都心商業施設の利便性評価
4	IV-104	正	新井 偉史	阪神高速道路	阪神高速道路におけるドライバー属性別の事故傾向
4	IV-117	学	牧之段 浩平	東京大学生産技術研究所	首都圏大規模水害による危険性の分析と避難方法の検討-江東デルタ地帯を対象として-
4	IV-123	学	古賀 智己	長崎大学大学院	昭和28年筑後川水害と川づくり・流域連携に関する調査
4	IV-134	学	相本 敬志	摂南大学	都市内植生分布の延焼遮断効果に関する一考察
4	IV-140	学	菊池 光貴	室蘭工業大学	高速道路無料化がもたらす人口移動に関する研究
4	IV-146	学	山崎 大樹	首都大学東京	幹線街路における車線選択行動の実証分析
4	IV-149	学	岡村 誠	日本大学	マイクロ交通シミュレーションを用いた高速域ACCの安全性に与える影響の評価
4	IV-159	正	西内 裕晶	日本大学	首都高速道路におけるランプ間OD交通量の集計時間単位の変更と分布形の変化に関する基礎的研究
4	IV-174	正	長田 哲平	日本大学	高齢者にやさしいまちづくりのための基礎的研究-医療機関の集約配置方策の検討-
4	IV-176	学	小塚 琢也	東京大学	東京都心部の駅間アクセシビリティ評価と基幹的バス路線導入に関する研究

部門	講演番号	会員種別	講演者	勤務先名	講演題目
4	IV-201	学	吉村 朋矩	福井工業大学	高校生における交通安全教育の実態と交通ルールの認識—大都市と地方都市の比較を通して—
4	IV-241	正	洲上 翔太	鉄道総合技術研究所	経年軌道スラブの衝撃弾性波法による非破壊検査
4	IV-251	正	萩尾 泰弘	JR東日本	TC型省力化軌道における保守困難箇所補修効果の検証について
4	IV-260	正	杉岡 祐亮	東海旅客鉄道	脱線防止ガード区間における軌道整備方法の一考察
4	IV-274	正	浦川 文寛	鉄道総研	まくらぎの固有モードが軌道の応答に及ぼす影響
4	IV-296	正	片岡 武	JR西日本	MTT復元作業計画作成システムの改良
4	IV-329	正	佐藤 大輔	JR東日本	低背植物への植生転換による鉄道沿線の雑草管理の検討
4	IV-332	正	木股 浩孝	JR東海	鉄道盛土におけるハイスベックネーリング工法の適用について
5	V-026	学	田中 貴子	福井大学	潜り透水舗装の伝熱特性
5	V-079	学	竹内 靖人	神戸大学	局所的鉄筋腐食を有するRCはりのせん断耐荷機構に関する実験的研究
5	V-085	正	木野 淳一	JR東日本	T形断面はりのせん断耐力におけるフランジ鉄筋の影響について
5	V-095	正	松本 光矢	鉄道総合技術研究所	逆対称曲げを受けるRC柱のせん断耐力に及ぼす側方鉄筋の影響
5	V-101	正	小林 寿子	東日本旅客鉄道	段落し部を有するRC橋脚の破壊性状に関する実験的検討
5	V-124	学	千野 琢磨	日本大学生産工学部	高温・高圧水を用いたアスファルト抽出試験の検討
5	V-125	正	大友 直之	川田工業	急速施工を伴う鋼橋床版取替えにおける防水層施工の適用性に関する検討
5	V-143	正	早川 勇	成田国際空港	空港連続鉄筋コンクリート舗装への再生骨材コンクリート適用に向けた一検討
5	V-148	正	橋本 智一	首都大学東京	再生粗骨材超硬練りコンクリートの乾燥収縮特性および省力化試験法の検討
5	V-156	正	臼井 達哉	大成建設 土木技術研究所	異なる養生温度条件下における高炉セメントコンクリートの自己収縮ひずみ特性
5	V-165	学	山本 聖輝	東京大学	熱力学境界条件の操作によるコンクリート構造の時間依存変形制御
5	V-177	学	高橋 聖弥	東京大学	フライアッシュコンクリートの塩分浸透抑制現象と液状水浸潤限界の関与
5	V-192	学	齋藤 佑貴	東北大学	海洋干満帯に暴露した鉄筋コンクリート大型試験体の4プローブ法による電気抵抗率の測定
5	V-200	学	松下 綾太	山梨大学	鉄筋腐食したRCはりの曲げ変形性能に及ぼすかぶり厚さの影響
5	V-206	学	村上 拓	芝浦工業大学	カソード領域がマクロセル腐食速度に及ぼす影響
5	V-214	学	辻本 剛士	金沢工業大学	覆工コンクリート中の水酸化カルシウムの溶脱とひび割れの進展メカニズムの考察
5	V-241	学	川崎 佑磨	熊本大学	AE法による鉄筋コンクリート腐食モニタリング
5	V-252	正	審良 善和	港湾空港技術研究所	干満帯に10年間暴露されたRC供試体の鉄筋腐食とその腐食診断結果との関係
5	V-255	正	川端 雄一郎	港湾空港技術研究所	暗視野下におけるコンクリートのひび割れ検出への応力発光センサの適用
5	V-262	学	酒井 雄也	東京大学	断面の膨張パターンと変形状に関する数値解析的検討
5	V-298	学	毛塚 貴洋	芝浦工業大学	表層透気係数と電気泳動試験結果の相関に関する一検討
5	V-310	学	岡本 理沙	東洋大学	干満帯環境下での電気防食のための通電方法に関する検討
5	V-330	学	糸数 青剛	横浜国立大学	暴露試験に基づく耐候性鋼材の性能評価手法に関する研究
5	V-386	正	樋口 隆行	電気化学工業	無機有機を複合した変形追従型止水材に関する検討
5	V-395	学	松下 ゆかり	愛媛大学	バイオグラウトのひび割れ補修に対する可能性への検討
5	V-427	正	野島 省吾	日本コンクリート技術	セメント系材料中の拡散現象に関する水銀圧入法を用いた空隙構造評価
5	V-433	正	内藤 英樹	東北大学	凍結融解を受けた繊維補強コンクリートの曲げ載荷試験
5	V-437	学	高橋 幹雄	金沢工業大学	RILEM CDFとASTM C 672の温度条件がスケーリングに及ぼす影響
5	V-443	正	HENRY MICHAEL	東京大学生産技術研究所	日本のコンクリート産業における持続可能な生産と材料の実現に向けた障害
5	V-481	正	迫井 裕樹	八戸工業大学	簡易破砕したホタテ貝殻のセメント固化体への利用に関する研究
5	V-518	正	大島 章弘	萩原工業	親水性を付与したポリプロピレン短繊維のプラスチック収縮ひび割れ抑制効果
5	V-526	正	渡邊 有寿	鹿島建設	羽田空港D滑走路UFC床版製作におけるAFt系UFCの製造・品質管理結果
5	V-536	学	新山 祐樹	日本大学	静荷重および走行荷重が及ぼすUFC埋設型RC床版の耐荷力性能
5	V-546	正	鈴木 雄大	東日本旅客鉄道	非貫通型アンカーの先端定着構造に関する基礎検討
5	V-560	学	井上 友	東京大学	機械式定着のひずみ進展に与える付着損傷の影響の模擬実験による検討
5	V-562	学	宇志呂 裕一	岡山大学	付着損失RC部材のファイバーモデルによる曲げ耐力計算
5	V-580	学	松崎 晋一郎	芝浦工業大学	養生期間がコンクリート表面から深さ方向への吸水性に与える影響
5	V-585	学	酒井 舞	東京工業大学	定着部に腐食を有するRCはりの力学性状と補修方法に関する基礎研究
5	V-600	学	山中 辰則	群馬大学	格子状連続繊維補強材を用いたRCはりの下面増厚補強効果
5	V-615	正	倉岡 希樹	JR東日本	柱基部のみ耐震補強を行ったRC柱の正負交番載荷試験
5	V-637	正	徳永 光宏	九州旅客鉄道	RC部材の変形性能に帯鉄筋配置が及ぼす影響
5	V-645	正	前田 友章	鉄道総合技術研究所	PC主鋼材が破断した実大PC桁の静的載荷試験
5	V-649	正	浅本 晋吾	埼玉大学	若材齢時のクリープ促進がコンクリートの材料特性およびPC梁の曲げ性状に与える影響に関する研究
5	V-662	正	戸田 晶	清水建設	大規模底版コンクリートの温度解析方法に関する一考察
5	V-677	正	中島 寛崇	首都高速道路	冷間曲げ加工による鋼製セグメントの製作
5	V-690	学	中島 裕幸	東京理科大学	コンクリート表面に形成される砂綿の発生機構に関する実験的検討
5	V-701	正	鈴木 将充	東急建設技術研究所	水硬性樹脂の付着特性がRC梁のせん断耐力に及ぼす影響
5	V-713	正	小山 広光	BASFポリリス	揺変性を有する早強型充填材の特性について
5	V-716	学	田北 翔	九州大学	CFRP製せん断補強筋の曲げ成形部強度の評価方法
6	VI-019	正	西野 俊論	大林組	覆工コンクリートのひび割れ防止対策について
6	VI-026	正	伊藤 哲	大林組	ワンタッチで接合可能な高耐力AGF工法の開発
6	VI-044	正	舟橋 孝仁	鉄道総合技術研究所	無線センサを活用したトンネル変状監視システムの実トンネルへの適用
6	VI-070	学	藍原 龍太	茨城大学	スマート連続繊維棒材およびその応用法の開発に関する研究
6	VI-080	学	家辺 麻里子	東京大学	中山間地域住民の道路安全性の認識に関する調査研究
6	VI-100	正	逸見 研二	ジェイアール東日本コンサルタンツ	洗掘を受けた橋りょう下部工の補強検討—その2: 補強検討結果—

部門	講演番号	会員種別	講演者	勤務先名	講演題目
6	VI-122	正	永留 健	東亜建設工業	羽田D滑走路建設工事におけるSGM軽量土の大規模急速施工(その1 施工時の配合管理)
6	VI-141	正	石井 裕泰	大成建設	可塑状グラウトの充填挙動に対する三次元数値流体解析の適用
6	VI-148	正	橋本 聖	土木研究所寒地土木研究所	浮き型式地盤改良を施した泥炭性軟弱地盤上の拡幅盛土
6	VI-153	正	文久瀬 磨衣子	関西工事測量	クラックスケール内蔵光波測量器を用いたダム堤体のひび割れ調査について
6	VI-174	学	杉町 仁哉	長崎大学	実在する逆L字ロックシェットの静的解析による安全性評価
6	VI-201	正	中村 征史	JR東日本	線路下横断工事(JES工法)における仮梁エレメントの設計
6	VI-240	正	堀口 賢一	大成建設土木技術研究所	実大供試体によるコンクリート一体型鋼製セグメントの耐火性の検討
6	VI-274	正	元尾 秀行	JR東日本 東京工事事務所	既存高架下駅で発生したコンコーススラブ下の空洞化に対する調査及び対策事例について
6	VI-279	正	伊豫田 紀子	五洋建設技術研究所	貝殻混じりセメント固化体の施工コストとCO2削減効果の試算
6	VI-288	正	吉川 康高	JR東日本	国道20号線新宿こ線橋架替 第8回線路切換におけるDC敷設について
6	VI-297	正	白根 勇二	前田建設工業	壁状構造物へ適用した低熱ポルトランドセメントの温度ひび割れ抑制効果
6	VI-301	正	渡部 裕	東洋建設	橋脚耐震補強工事における高流動コンクリートによる長距離ポンプ圧送の施工
6	VI-313	正	八木 隆之	大林組	仮巻き工法による明り巻きアーチカルバートの施工
6	VI-327	正	中山 泰成	東日本旅客鉄道 東京工事事務所	東北縦貫線整備における路盤コンクリートの施工
6	VI-344	正	竹園 浩司	建設技術研究所	流域下水道雨水幹線(貯留型)の排気施設の施工報告
6	VI-355	正	近藤 岳史	大林組	GPSおよび加速度応答法を利用した河川土工における盛土の面的管理
6	VI-360	正	滝波 真澄	飛鳥建設	ICタグを活用したトラックミキサー運行管理による品質管理
6	VI-374	正	山田 一宏	熊谷組	ミスト噴霧によるコンクリートダム打設時の養生方法と効果
6	VI-377	正	西川 祐	東京地下鉄	東京メトロ小竹向原駅・千川駅間の連絡線計画について
6	VI-384	正	大橋 幸子	国土技術政策総合研究所	調査・設計業務における総合評価落札方式の実施状況について
6	VI-394	正	長尾 千瑛	中日本高速道路	民間技術力を活用した設計・施工一括発注方式の試行に関する一考察
6	VI-396	正	村上 真也	横浜市役所	民間活力を導入した高速道路整備事業におけるリスク分担の検討
6	VI-417	学	谷東 真基	香川高等専門学校	香川県内市町の道路管理者を対象とした実践的橋梁維持管理講座の報告
6	VI-438	正	若槻 晃右	阪神高速道路	アセットマネジメントシステムの実用に向けた取り組み
6	VI-463	正	佐々木 直之	清水建設	セメントベントナイト注入による鋼矢板引抜時沈下低減工法の実用化
6	VI-473	学	八木 啓介	長岡技術科学大学	透水性矢板を用いた芯壁堤の浸透崩壊に対する抵抗性能
6	VI-483	正	塩崎 正人	三井住友建設	照明による陰影を利用した変状抽出の自動化に関する研究
6	VI-490	正	松田 浩朗	飛鳥建設 技術研究所	無線LANを用いた測位技術に関する基礎的研究
6	VI-505	正	河田 誠	JR東日本	新宿駅構内線路直下における薬液注入工について
6	VI-513	正	杵築 秀征	西松建設	簡易かぶり厚測定器の開発
6	VI-518	正	土橋 幸彦	東日本旅客鉄道	映像伝送システムを用いた遠隔地における現場管理方法の検証試験
7	VII-004	正	工藤 雄大	ドーコン	十勝川水系における河川窒素濃度と土地利用に関する研究
7	VII-024	正	関川 貴寛	静岡県立大学	フェリハイドライト培地を用いた異化的鉄還元細菌の検出と同定
7	VII-051	学	小野 心也	長岡技術科学大学	海洋水族館における高塩分濃度含有廃水からの生物学的窒素除去技術の開発
7	VII-053	正	久保田 健吾	東北大学	パーモイル圧搾廃液処理嫌気性ラグーンの微生物群集構造解析
7	VII-062	正	谷口 省吾	大阪産業大学	電気化学的処理法によるPFOAおよびPFOSの分解と構造異性体ごとの除去特性について
7	VII-096	正	鈴木 章浩	森ビル	生物多様性価値の向上を目指した都市開発事例
7	VII-109	学	渡邊 保貴	茨城大学	締固め供試体を用いた浄水汚泥のシリアルバッチ試験
7	VII-113	正	山崎 俊樹	首都高速道路	大橋“グリーン”ジャンクションの環境配慮手法について
7	VII-137	正	渡辺 勉	鉄道総合技術研究所	鉄道RCラーメン高架橋の構造物音評価に関する数値解析による検討
7	VII-171	正	河村 隆	信州大学	天然ゼオライトを用いた湖沼底泥からの栄養塩類溶出抑制効果
7	VII-182	学	古川 隼士	宮崎大学	PFGE法を用いた沿岸域レクリエーション水域のふん便汚染源追跡
7	VII-188	学	稲垣 嘉彦	早稲田大学	浮遊植物を用いた栄養塩類及び重金属除去に関する基礎的研究
7	VII-194	正	古川 靖英	竹中工務店 技術研究所	油含有土壌の原位置フラッシング工法の検討
7	VII-212	学	橋口 亜由未	大阪産業大学大学院	鉄バクテリア法で形成される鉄・マンガ酸化化合物中のマンガン価数の変化
10	CS1-005	正	富村 芽久美	宮城県黒川高等学校	廃棄物を用いた作品制作について
10	CS1-011	正	森本 恵美	徳島大学	長期インターンシップによる公務サービス人材の育成
10	CS1-016	正	真田 誠至	土木研究所	体験と映像で伝える土木教育の実践-河川環境を題材にして-
10	CS2-005	正	藤野 和雄	高速道路総合技術研究所	CFRPシートによるけた端部の腐食補修に関する解析的検討
10	CS2-013	正	新井 崇裕	鹿島建設技術研究所	直接発進到達に用いるH形SZパイルのH形鋼との連結部に関する検討
10	CS2-024	学	菅沼 哲	大阪市立大学	コンクリート充填鋼管柱部材のせん断実験
10	CS2-035	正	平 陽兵	鹿島建設	既設鋼桁と橋台の一体化方法の検討 -その2 隅角部載荷実験-
10	CS3-001	学	Kawin Saiprasertkit	東京工業大学	Effect of strength matching on low cycle fatigue performance of load carrying cruciform joints with weld defects
10	CS4-006	学	古川 祐輔	広島大学	折畳める仮設橋プロトタイプのFEM解析
10	CS4-015	正	渡邊 康人	エイト日本技術開発	広島南道路太田川放水路橋りょうデザイン提案競技における報告
10	CS5-007	学	石川 春香	函館工業高等専門学校	乗用車専用の木製高架橋による交差点の渋滞緩和
10	CS7-005	正	佐々木 敏幸	鹿島建設	廃棄物の発熱が充てん材の諸性状に及ぼす影響-地下空洞型処分施設性能確認試験-
10	CS7-011	学	石橋 直樹	茨城大学	ベントナイトの圧密特性に及ぼす供試体の寸法効果および初期乾燥密度の影響
10	CS7-026	正	木村 誠	日本原子力研究開発機構	緩衝材中の塩濃縮・析出現象評価に向けた数値実験システムの開発(その2)
10	CS7-052	正	取達 剛	鹿島建設	浅地中処分におけるセメント系材料の変質に関する解析的検討
10	CS8-010	学	柴沼 一樹	京都大学	XFEM近似の不完全性を解決するための再定式化の提案
10	CS8-024	学	中村 正人	中央大学	有限被覆法による自由表面を有する流れ解析
10	CS9-012	学	伊藤 佳介	関西大学	大規模地下駐車場における浸水時避難に関する検討

5. 研究討論会

今年度の研究討論会は、初日の講演会終了後と3日目の午後に実施された。昨年にならい、今年も研究討論会と年次学術講演会を平行して実施しないで、2時間の専用枠で実施する方法とした。今年度のテーマ数は、初日13、3日目11の合計24テーマであった。近年の大会の研究討論会のテーマ数と入場者数を表1に、今大会の研究討論会テーマと各会場の入場者数を表2に示す。参加者数は、初日912人、3日目789人の合計1701人であった。

今年の研究討論会も各委員会から提出された様々なテーマの議論が行われた。テーマを大きく分類すると、社会資本整備（公共調達、建設マネジメント、入札、まちづくり、市民合意）、環境保全（環境負荷、ライフサイクルアセスメント、低炭素、温暖化対策、循環型社会、環境調和、維持管理）、安全対策（地震防災、リスクマネジメント、災害対策、危機管理、放射性廃棄物処理）に関連するものや建設材料の応用、力学現象の解明などである。中でも研04、研09、研13等の力学や材料に関する討論会は100名を超え、盛況であった。

問題点としては、例年と同様であるが、大会直前まで話題提供者の人数や氏名が未定のままの会場があったことや、最終的な会場の規模と設備について担当委員会に確認をとっていなかったことである。また、日程変更の希望を比較的直前まで受け入れたことにより、大会直前に会場の変更があり、参加者に対して混乱を招いたおそれがあった。

最後に、研究討論会の運営にご協力いただいた委員、学生スタッフの方々、会場へ足を運んでいただいた参加者の皆様に心から感謝申し上げます。（研究討論会班長 古内 仁）



研究討論会

表1 各開催年度におけるテーマ数と参加者数

開催年度(年)	テーマ数(件)	入場者数(人)
2004	21	1,142
2005	25	1,770
2006	27	1,729
2007	22	1,242
2008	23	1,805
2009	23	1,933
2010	24	1,701

表2 研究討論会のテーマと参加者数

番号	テーマ	委員会	入場者数
研01	先輩に聞く—環境工学の将来—	環境工学委員会	104
研02	公共調達制度のPDCA システムを考える	建設マネジメント委員会	43
研03	環境負荷指標がまちづくりを変える	土木計画学委員会	47
研04	力学現象解明への挑戦 —現状と課題—	応用力学委員会	148
研05	社会資本のライフサイクルアセスメントの開発を目指して—低炭素都市における社会基盤づくりのデザインにむけて—	環境システム委員会・地球環境委員会	54
研06	21世紀の建設材料 アルミニウム合金の可能性	鋼構造委員会	51
研07	放射性廃棄物処分の長期の安全確保に向けて	エネルギー土木委員会	68
研08	洋上風力発電技術の現状と将来展望	構造工学委員会	75
研09	環境調和型コンクリート材料学の創造に関する研究討論会	コンクリート委員会	105
研10	チリ大地震から何を学ぶ—国際的視点から見た我が国の地震対策への教訓—	地震工学委員会・海岸工学委員会	78
研11	災害記録映像で学ぶ防災技術教育—技術教育における映像メディアの効果 その3—	土木技術映像委員会	33
研12	高度センサ利用技術による「維持管理CALS」の提案	情報利用技術委員会	88
研13	市民主体の取り組みにおける土木技術者のかかわり方	コンサルタント委員会	18
研14	時代が求める地下空間利用のあり方	地下空間研究委員会	46
研15	地球温暖化対策—土木学会はいかに行動すべきか—	地球環境委員会	95
研16	バイオマス利活用による地域循環圏構築に向けた取組—北海道を例として	環境システム委員会	41
研17	木材の使い方がいい—幅広い分野への普及をめざして—	木材工学特別委員会	37
研18	岩盤斜面崩壊の防災・減災・避災を目指して—斜面ハザード評価からの研究アプローチ—	岩盤力学委員会	61
研19	北海道の火山から学ぶ—火山との共生<活用と防災—土木の役割>	地盤工学委員会	58
研20	新形式複合構造物のその後	複合構造委員会	86
研21	コンクリート舗装を賢く使う	舗装工学委員会	138
研22	地震リスク解析とリスクマネジメントを考える—現状と課題／事例解析—	地震工学委員会	77
研23	土木工学における実践型技術者の行動とその研究	コンサルタント委員会	77
研24	水理・水文学解析ソフトウェア統合型共通基盤の活用と総合的な水解析ソフトウェアへの進化に向けて	水工学委員会	73
	合計		1,701

6. パネル展示

今大会のパネル展示は、前回大会と同様に「土木コレクション 2010 HANDS + EYES」を展示した。

「土木コレクション2010 HANDS + EYES」は、土木界が保有する歴史資料、図面、写真など普段目にすることができない各種コレクションを展示公開するもので、今回の展示では、北海道の歴史的な構造物の図面、写真等19点を展示した。さらに今回は、「市民生活に身近な土木技術」として、普段のぞくことのない土木の世界を少しでも身近に感じて頂くために、市民生活と関わりの深い団体（北海道開発局、北海道、札幌市、道路、電力、鉄道等）から提供頂いた。

展示会場は、より多くの市民の方々に見て頂くために、JR札幌駅西口コンコースに設営した。その結果、札幌駅を利用している多くの方々にパネル展示を見ていただき、大会期間中は土木学会関係者のもとより、高齢者や学生の方々にも足を止めて見て頂けた。大会期間中は約3,000名の方々に来場いただき、展示会としては成功に終わった。（展示班長 川村 力）



パネル展示 (JR札幌駅西口コンコース)

7. 交流会

今大会の交流会は、「北海道らしさ」を醸し出すことを目的に、大会2日目の9月2日(木)、北海道開拓の歴史に重要な役割を果たした「開拓使麦酒醸造所」に縁のあるサッポロビール園を会場に実施した。

来賓や大会運営を支えた学生スタッフを含め、総勢487名の方々にご参加頂き、盛大にとり行うことができた。

開会にあたり、高松泰大会実行委員長(国土交通省北海道開発局長)による主催者代表挨拶、開催地を代表して高井修北海道副知事からの歓迎の挨拶に引き続き、海外来賓の紹介が行われ、阪田憲次土木学会会長の乾杯の音頭により歓談へと移った。

その後、次期開催地の四国支部代表である藤澤伸光支部長(高知工科大学教授)より、ご挨拶と次回開催地のご紹介をいただき、最後に馬場直志実行副委員長(北海道大学工学研究院長)から閉会にあたっての挨拶を頂くとともに、一本締めにより札幌の交流会は幕を閉じることとなった。

会場が開放的な雰囲気であったこともあり、北海道ならではのジンギスカン鍋を囲みながら会場全体で歓談が弾み、また、旬の食材を使った「じゃがいもバター」、新鮮な牛乳で作られたアイスクリームなど特産品に

より、北海道の「食」の魅力を存分にご堪能いただけたものと思う。

多数のみなさまにご参加頂きましたこと、交流班スタッフ一同、厚く御礼を申し上げます。（交流班長 高松 康廣）



交流会(サッポロビール園)

8. 土木学会百周年記念事業キックオフ討論会

「土木」の原点と百周年

2014年に、土木学会は創立百周年を迎える。土木学会では、百周年を迎えるにあたり、これからの土木が何をビジョンとし、何を為すべきかを考えるための「百周年記念事業」を、今年から2014年に向けての五カ年の間に、精力的に持続的に展開していくことを予定してい

る。本討論会は、まさにそうした諸事業の「キックオフ」として開催するものであり、本年度の全国大会初日の午後200名を超す参加者を集めて開催された。また、こうした主旨から、本討論会は土木学会百周年記念事業準備委員会の主催、ならびに、全国的な議論を喚起

することを企図し、全国各支部と連携しながら毎年土木の日を推進している土木学会土木の日実行委員会が共催する格好にて開催された。

本討論会は、『土木学会の「百周年」に向けて、何をすべきか?』と題した第一部と、『「土木」の原点を考える』と題した第二部とから構成されるものとして開催された。

第一部は、百周年記念の一連の諸事業の文字通りの皮切りとして、「土木学会の百周年」にあたって何が求められているのかを議論すべく、冒頭にて百周年記念事業準備委員会から開会挨拶がなされ、その上でこれまで百周年記念事業準備委員会で議論されてきた内容が報告された。この中で、100周年記念事業では、本部事業として、2014年での記念式典や記念出版に加えて、一般公衆に土木の取り組みを訴求することを意図した土木に関わる各種展覧会や討論会・シンポジウムを、土木の日や関連委員会の諸活動と連携しながら進めていくことが予定されていることが解説された。またそうした本部事業に加えて、全国の各支部をはじめとした土木学会内外の各種組織・団体から、百周年記念事業を「公募」して実施していくことを予定している旨が説明された。その上で全国各支部から、百周年記念事業としてどのような事業を為していくべきかについての発表がなされた。その中で、一般市民の土木に対する理解・認識を深めていくための様々な取り組みの必要性が、繰り返し主張された。そのために、テレビや映画等のマスメディアの活用、市民参加型のシンポジウムや展覧会の開催を、一般社会に向けて展開していくことの重要性が論じられた。またその議論の中で、かつての土木事業は固い岩盤や河川の急流といった物理現象がその事業を通して公益増進の大きな妨げとなっていたが、現在は、世論における事業の無理解というものが、その公益増進の大きな妨げになっているという点が改めて議論され、そうした無理解の問題を緩和していくためにも、上記の様な遠心的なメディア活動の中心に、適切な思想を据えた研究・言論活動を展開していく求心的な諸活動を定位することの必要性が議論された。

以上の議論に続く第二部では、これから5年間かけて継続していく様々な諸議論の第一弾として、「土木」を学会として改めて定義付けることを念頭におきつつ、「土木の原点を考える」と題した討論会を開催した。第二部では、まず丹保憲仁元土木学会会長、ならびに、同じく栢原英郎元土木学会会長から、「土木の原点」に関するご講話を頂いた。丹保先生からは、まず、土木という言葉は築土構木からの言葉である一方、英語ではCivil Engineeringであり、このCivil Engineeringが何であるかを考えることこそが、土木の原点であろうという点が指摘

された。その上で、我々人類の文明がどのように展開してきたのかを、前近代、近代と時代を経て概観した上で、これからの土木はどうあるべきなのか、21世紀、22世紀の文明がどうあるべきなのかを、参加者各位に問いかける格好でその講話を取りまとめられた。続く栢原元会長からは、中村哲氏という一人の医者が為した実践についてのご発表が為された。中村氏は一人の医者でありながら、30代後半にアフガニスタンに派遣され、現地の人々に様々な医療行為を行っている内に、抜本的に人々の健康を維持、増進させるためには、人々の住まう環境そのものが衛生的であることが何よりも重要であることに思い至ったという。そして「100の診療所よりも一本の用水路の方が有用だ」という言葉と共に、土木工学についての知識を学んだ経験が無いまに、用水路整備という土木の仕事に従事された。こうした一連の物語を語ることを通じて、世のため人のためという思いの下、織りなす営為こそが、土木の原点であるに違いないと暗示された。

こうした土木の原点に関わる二つの講話を受け、土木界の外側の一般社会の視点から土木の重要性を取り上げ、小学校教育で土木学習を展開されておられる新保元康山の手南小学校長、ならびに、土木界と一般社会との接点のコミュニケーション活動を種々に展開されている大成建設の高橋薫氏を交え、土木の原点に立ち返り、一般の人々の幸福と文明の在り方に思いを馳せながら為すべきこれからの土木の在り方についての議論が展開された。

(百周年記念事業準備委員会幹事 藤井 聡)



百周年記念事業キックオフ討論会

9. 平成 22 年度全国大会「映画会」

土木技術映像委員会では、広島、仙台、福岡に引き続き、全国大会での「映画会」を企画・開催した。当委員会では土木技術映像の収集・調査・評価と土木図書館映像ライブラリーへの蓄積・保管とともに、土木技術映像の広報活動の一環として平成13(2001)年度から定期上映会「土木学会イブニングシアター」を59回、その他市民向け特別上映会などを開催している。今年度は当委員会主催の研究討論会「災害記録映像で学ぶ防災技術教育—技術教育における映像メディアの効果その3」と連動して、防災特集を中心に北海道関連の作品も用意し、そのほか映画コンクール受賞作品や選定作品など当委員

会がセレクトした土木技術映像19本を3日間にわたり上映した。作品リストは下表に示すとおりである。

参加者は合計420名と、例年のない猛暑にもかかわらず、多くの方に足を運んで頂いた。当委員会では上映の円滑な運営をはかるため、HDDメディアプレイヤーを用意して上映自動化の試みも実施しているが、アンケートのコメントでは「良い企画であり今後も続けて欲しい」「防災・北海道特集はタイムリーだった」「地方での上映会をぜひ企画して頂きたい」などの意見が寄せられた。引き続き次年度以降の企画に反映していきたい。(土木技術映像委員会幹事長代理 榊山 清人)

表 上映作品リスト

日程	タイトル	作成年	上映時間	
9月1日	午前	余部鉄橋の記憶	2007	27分
		昭和49年多摩川狛江市猪方地先災害復旧記録	2005	32分
		荒川放水路物語—川がはぐくむ暮らしと文化	2002	18分
		佐久間ダム	1958	96分
	午後：防災特集	橋の耐震技術最前線	1998	22分
		復旧の軌跡—阪神・淡路大震災土木施設の災害記録	1998	27分
		地域の安全を守る—水無川1号砂防ダムの記録—	1998	24分
		昭和34年 伊勢湾台風	2008	22分
		福井豪雨アーカイブス ダイジェスト編	2008	15分
		崩れ	2006	17分
連動企画：研究討論会「災害記録映像で学ぶ防災技術教育」			120分	
9月2日	午前：北海道特集	青函トンネル	1985	37分
		稚内港北防波堤ドーム—耐震補強工事記録	2003	20分
		函館港島防波堤災害復旧工事	2006	15分
		日本の近代土木を築いた人々	2002	58分
9月3日	午前	ボスボラス海峡横断鉄道トンネル	2008	26分
		横浜大棧橋の軌跡を求めて	1997	30分
		街の一体化と安全のために—目黒線不動前～洗足駅間地下切り替え工事	2002	20分
		首都高速道路を守れ—疲労き裂対策3000日の軌跡	2008	30分
		石を架ける—石橋文化を築いた人々	1996	39分
		荒川放水路物語—川がはぐくむ暮らしと文化	2002	18分
		余部鉄橋の記憶	2007	27分
	午後	復旧の軌跡—阪神・淡路大震災土木施設の災害記録	1998	27分
		佐久間ダム	1958	96分
		崩れ	2006	17分

10. 国際関連行事報告

国際委員会が担当する行事として、本会と協力関係にある海外の学協会からの参加者とのラウンドテーブルミーティング(円卓会議)を実施したほか、国際セッションならびに日本工学会(JFES)、世界工学団体連盟(WFEO)および本会の共催による国際シンポジウム、を期間中に開催した。

ラウンドテーブルミーティングのテーマは、本年の阪田会長による特別講演会に合わせて“Compliance-Oriented Infrastructure Development”とした。上田多門・北海道大学教授の進行により、会長による基調講演ののち、各国の参加者から本テーマに即した事例や課題について話題提供があり、活発な討議が行われた。

2日目は、年次学術講演会の一セッションである国際セッションに投稿のあった4編の研究発表が行われた。また同日には「第4回災害リスクマネジメントに関する国際シンポジウム」が開催され、地震災害や水災害などについて、日本のほか台湾、韓国の専門家により講演が行われた。

1日目の夜には、海外から参加の方々をお招きして国際委員会主催のウェルカムレセプションを催し、和やかな雰囲気のもと、交流を深めた。また、2日目の交流会にも、海外来賓として出席いただいた。



ラウンドテーブルミーティングでの阪田会長のご挨拶

今年も8ヶ国から約30名の参加があり、全国大会国際関連行事はアジアを中心とした国々の多国間交流の場として定着してきている。引き続き、国内はもとより海外から多くの方々に参加いただき、より交流が活発化するよう努力したい。なお、恒例の海外支部会議を初日に行った。

最後に、国際関連行事の実施にあたって、全国大会委員会、全国大会実行委員会、北海道支部ならびに会場となった北海道大学札幌キャンパスの関係者、テクニカルツアーの訪問先の皆様にも多大なご協力をいただいた。ここに、深く謝意を表する次第である。

(土木学会国際委員会 幹事長 加々美 修一)

【全体概要】

期 間：平成22年9月1日(水)～2日(木)

会 場：北海道大学 札幌キャンパス

情報教育館 3階 スタジオ型多目的中講義室ほか

海外学協会：米国土木学会／大韓土木学会／中国土木水利工程学会／
バングラデシュ工学会／モンゴル土木学会／フィリピン土木
学会／ネパール技術者協会／世界工学団体連盟／土木
学会台湾分会／土木学会韓国分会／土木学会モンゴル分
会／土木学会インドネシア分会

8ヶ国、1団体、4海外分会 計28名

【プログラム】

(1) ラウンドテーブルミーティング(Roundtable Meeting)

タイトル：“Compliance-Oriented Infrastructure Development”
「コンプライアンス推進としての社会基盤整備」

日時：平成22年9月1日(水) 15:00～17:00 参加者51名

(2) The 4th WFEO-JFES-JSCE Joint International Symposium
on Disaster Risk Management

「第4回災害リスクマネジメントに関する国際シンポジウム」

日時：平成22年9月2日(木) 9:00～12:00 参加者32名

(3) International Session(国際セッション)

日時：平成22年9月2日(木) 10:25～11:55

参加者142名

11. 実行委員会組織図・委員会名簿

土木学会平成 22 年度全国大会実行委員会 組織構成図



土木学会平成22年度全国大会実行委員会名簿

■：常任委員会委員、●：幹事会委員

部会名	班名	氏名	所属・役職	
委員長		■ 高松 泰	北海道開発局長	
副委員長		■ 馬場 直志	北海道大学大学院工学研究院長	
副委員長		■ 岸 徳光	室蘭工業大学大学院教授	
副委員長		■ 鮎田 耕一	北見工業大学学長	
副委員長		■ 宮木 康二	北海道建設部長	
副委員長		■ 長利 秀則	札幌市厚別区長	
副委員長		■ 川村 和幸	(独)土木研究所寒地土木研究所長	
幹事長		■ ● 清水 康行	北海道大学大学院教授	
委員		■ 新宮 康弘	北海道旅客鉄道(株)工務部長	
委員		■ 松下 啓郎	北海道電力(株)土木部長	
委員		■ 山本 裕己	東日本高速道路(株)北海道支社長	
委員		■ 藤田 正人	(社)日本土木工業協会北海道支部長	
委員		■ 大島 紀房	(株)構研エンジニアリング社長	
相談役		■ 三浦 清一	北海道大学大学院教授	
監査役		■ 石井 政夫	(株)開発調査研究所社長	
監査役		■ 谷藤 義弘	東日本高速道路(株)北海道支社 技術部技術企画課課長代理	
総務部会	部会長	■ ● 渋谷 元	北海道開発局開発監理部 開発調整課長	
	総務班	班長・副部会長	● 橋詰 知喜	北海道開発局開発監理部 開発調整課開発企画官
			梅木 幸治	北海道開発局開発監理部 開発調整課調整係長
			森口 敏史	北海道開発局開発監理部 開発調整課総務係長
			七崎 由香	北海道開発局開発監理部 開発調整課開発専門職
	会場班	班長・副部会長	● 横田 弘	北海道大学大学院教授
		副班長	山田 朋人	北海道大学大学院准教授
		副班長	福田 文彦	北海道大学大学院助教
			川村 里実	北海道大学大学院特任助教
			猿渡 亜由未	北海道大学大学院助教
	会計・調達班	班長・副部会長	● 高橋 丞二	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術管理企画官
			合田 彰文	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術開発係長
			林 美和子	(社)土木学会北海道支部事務局
			今田 和雄	(社)日本土木工業協会北海道支部事務局長
			市川 幸秀	大成建設(株)営業部課長
	総合受付・案内班	副部会長	● 岩佐 英昭	北海道電力(株)土木部土木センター グループリーダー
		班長	工藤 正彦	北海道電力(株)土木部電源開発グループ副主幹
			八嶽 昇	鹿島建設(株)営業部部长
			芳賀 康博	(株)大林組 営業部部长
			前山 順宏	北海道電力(株)土木部原子力土木グループ主任
	広報班	班長・副部会長	● 三木 雅之	北海道砂防災害課長
			西岡 寿行	北海道砂防災害課主査
			小原 浩史	(株)ドーコン構造部主任技師
展示班	班長・副部会長	● 川村 力	北海道旅客鉄道(株)工務部工事課グループリーダー	
		金澤 文雄	北海道旅客鉄道(株)工務部工事課主席	
		伊東 公人	北海道旅客鉄道(株)工務部工事課主席	
交流会班	班長・副部会長	● 高松 康廣	札幌市中央区市民部長	
		茂木 秀則	札幌市雪対策室計画課計画担当係長	
本部関連行事班	班長・副部会長	● 田中 潤一	東日本高速道路(株)北海道支社 技術企画課課長	
	学術部会兼務	(田中 岳)	(北海道大学大学院助教)	
		熊谷 清貴	(株)ドーコン構造部主任技師	
学術部会	部会長	■ ● 上田 多門	北海道大学大学院教授	
	副部会長	● 萩原 亨	北海道大学大学院准教授	

土木学会平成 22 年度全国大会実行委員会名簿

部会名	班名		氏名	所属・役職
	副部会長		● 木村 一郎	北海道大学大学院准教授
	統括班	班長		佐藤 靖彦 北海道大学大学院准教授
	学術講演班	班長(統括班副班長兼務)		渡部 靖憲 北海道大学大学院准教授
		第I部門長・副部会長	●	三上 修一 北見工業大学教授
		第I副部門長		松本 高志 北海道大学大学院准教授
		第II部門長		泉 典洋 北海道大学大学院教授
		第II副部門長		田中 岳 北海道大学大学院助教
		第III部門長・副部会長	●	木幡 行宏 室蘭工業大学大学院教授
		第III副部門長		横濱 勝司 北海道大学大学院助教
		第IV部門長		岸 邦宏 北海道大学大学院准教授
		第IV副部門長		鈴木 聡士 北海学園大学准教授
		第V部門長		志村 和紀 北海道大学大学院助教
		第V副部門長		馬場 道隆 (独)土木研究所寒地土木研究所総括主任研究員
		第VI部門長・副部会長	●	二宮 嘉朗 (独)土木研究所寒地土木研究所技術開発調整監
		第VI副部門長		何 興文 北海道大学大学院助教
		第VII部門長		佐藤 久 北海道大学大学院准教授
		第VII副部門長		佐野 大輔 北海道大学大学院准教授
		共通部門長		石川 達也 北海道大学大学院准教授
		共通副部門長		佐藤 太裕 北海道大学大学院助教
		研究討論班	班長(統括班副班長兼務)	
特別講演討論会部会	部会長		■ ● 中辻 隆	北海道大学大学院教授
	副部会長		● 杉山 隆文	北海道大学大学院教授
	副部会長		● 川村 彰	北見工業大学教授
	特別講演班	班長		高橋 清 北見工業大学准教授
	全体討論班	班長		高野 伸栄 北海道大学大学院准教授
		副班長		内田 賢悦 北海道大学大学院助教
学会誌編集部会	部会長		■ ● 高橋 守人	(独)土木研究所寒地土木研究所 寒地基礎技術研究グループ長
	支部特集班	班長・副部会長	●	葛西 聡 (独)土木研究所寒地土木研究所 寒地道路研究グループ上席研究員
		副班長(併任)		(佐藤 太裕) (北海道大学大学院助教)
	会誌案内班	班長・副部会長	●	浜本 聡 (独)土木研究所寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ上席研究員
(事務局)				松尾 政宏 (社)土木学会北海道支部事務局長

※()書きは、併任

土木学会平成22年度全国大会補助者名簿

部会名	班名	係名	氏名	所属・役職	備考	
総務部会	総務班		石上 真	北海道開発局開発監理部 開発調整課課長補佐		
			三角 一史	北海道開発局札幌開発建設部 河川計画課第1計画係		
			杉村 大輔	北海道開発局札幌開発建設部 河川工事課第1改修係		
			佐々木 寛	北海道開発局札幌開発建設部 河川管理課企画調査係		
			稲葉 一考	北海道開発局建設部 道路維持課防災第1係		
			崎谷 唯比古	北海道開発局建設部 道路計画課調査第1係		
			小貫 信幸	北海道開発局建設部 道路建設課改良係		
			水口 陽介	北海道開発局港湾空港部 港湾建設課港湾技術係		
			中山 仁	北海道開発局港湾空港部 港湾建設課建設第2係		
			杉森 信博	北海道開発局港湾空港部 港湾建設課建設第1係		
			会計・調達班	井内 彰宏	北海道開発局事業振興部 技術管理課企画係長	
				岩淵 直人	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術開発係主任	
				飯田 和彦	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術活用係長	
				小川 亮司	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術活用係	
				千葉 誠一	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術活用係	
				石谷 直也	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術調査係長	
				横山 慎司	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術調査係	
				加賀谷 直	北海道開発局事業振興部 技術管理課技術調査係	
				岡山 重雄	北海道開発局事業振興部 技術管理課基準第1係長	
	柴田 貴規	北海道開発局事業振興部 技術管理課基準第1係				
	浅井 俊輔	北海道開発局事業振興部 技術管理課基準第2係				
	高橋 大輔	北海道開発局事業振興部 機械課調査係				
	伍楼 和哉	北海道開発局事業振興部 機械課施工環境係				
	伏見 一	北海道開発局事業振興部 機械課施工環境係				
	熊谷 卓士	北海道開発局事業振興部 機械課電気通信官情報通信システム係				
総合受付・案内班	総合受付班	会場案内係	伊藤 俊裕	岩田地崎建設(株) 環境ソリューション部次長		
		会場案内係	細淵 哲史	(株)大林組札幌支店 総務部総務課		
		会場案内係	岡崎 亮	(株)大林組札幌支店 総務部総務課		
		会場案内係	古田 卓也	北海道電力(株)水力部土木グループ副主幹		
		会場案内係	笠井 秀男	北海道電力(株)土木部電源開発グループ副主幹		
		会場案内係	立田 泰輔	北海道電力(株)水力部土木グループ		
		会場案内係	宮下 将典	北海道電力(株)水力部土木グループ		
		会場案内係	尾林 孝平	北海道電力(株)土木部土木エンジニアリンググループ		
		会場案内係	和泉 康平	北海道電力(株)土木部電源開発グループ		
		総合受付班	小池 哲平	鹿島建設(株)北海道支店 管理部総務グループ		
		総合受付班	西木 祐輔	鹿島建設(株)北海道支店 北の峰トンネルJV工事事務所		
		総合受付班	近藤 美和子	鹿島建設(株)北海道支店 管理部経理グループ		
		応接係	松本 みどり	大成建設(株)管理部管理室		
		広報班	広報担当	金子 史樹	北海道建設部土木局砂防災害課 主任	
星井 篤郎	北海道建設部土木局砂防災害課 主任					
展示班	展示担当	穴戸 真也	北海道旅客鉄道工務部工事課 課員			
交流会班		植木 広行	札幌市建設局土木部雪対策室計画課調査担当係長			
		田村 尚己	札幌市建設局土木部雪対策室計画課			
		川合 潤	札幌市建設局土木部雪対策室計画課			
		高井 和之	札幌市建設局土木部道路課			
		西尾 淳	札幌市建設局土木部道路課			
	本部関連行事班	国際映写担当	谷藤 義弘	NEXCO東日本北海道支社 技術企画課長代理		

12. 平成 23 年度全国大会の紹介

実施期間 平成23年9月7日(水)～9月9日(金)

実施場所 愛媛大学城北キャンパス
 (学術講演会、研究討論会)
 松山市民会館(大ホール)
 (特別講演会、全体討論会)
 松山全日空ホテル(交流会)



松山市へのアクセス

飛行機(松山空港)

東京(羽田) …… 約80分
 名古屋(中部) …… 約75分
 大阪(伊丹) …… 約50分
 福岡 …… 約40分
 鹿児島 …… 約60分
 ソウル …… 約90分
 上海 …… 約2時間40分

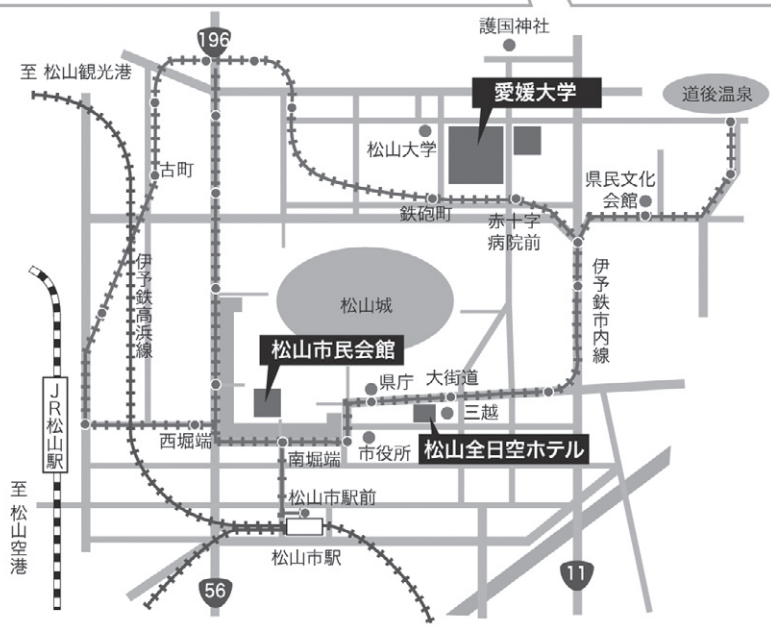
JR(JR松山駅)

東京 …… 約6時間30分
 新大阪 …… 約4時間
 福岡 …… 約5時間
 ※新幹線乗車「岡山駅」乗換
 「特急しおかぜ」乗車の場合

各会場までの移動時間

電車ご利用の場合

愛媛大学→松山市民会館 約15分
 愛媛大学→松山全日空ホテル 約10分
 松山市民会館→松山全日空ホテル 約5分



愛媛大学 城北キャンパスへのアクセス

■松山空港から

伊予鉄バスをご利用の場合

JR松山駅まで：空港リムジンバス「JR松山駅前」下車
 松山市駅まで：空港リムジンバス「松山市駅」下車

■JR松山駅から

伊予鉄道市内電車をご利用の場合

環状線(古町方面行き)「赤十字病院前」下車、
 北へ徒歩約2分

伊予鉄バスをご利用の場合

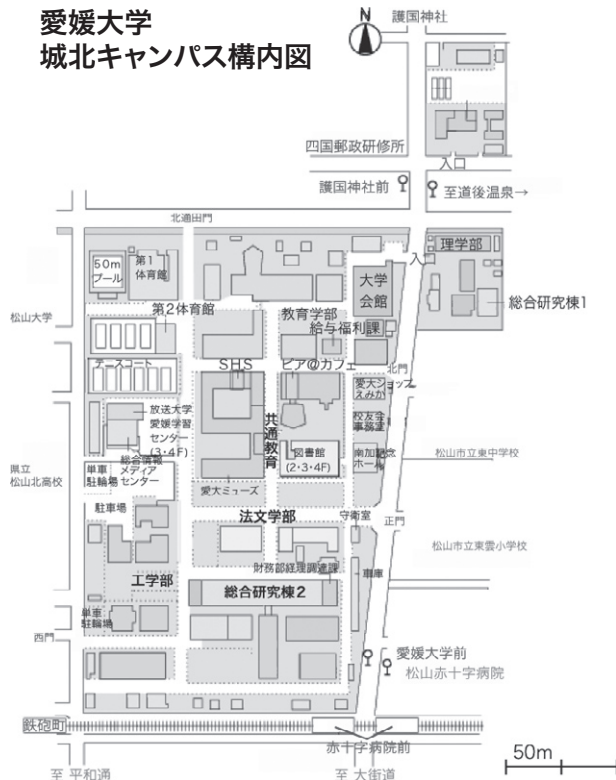
東西線「愛媛大学前」下車

■松山市駅から

伊予鉄道市内電車をご利用の場合

環状線(大街道方面行き)「赤十字病院前」下車、
 北へ徒歩約2分

愛媛大学 城北キャンパス構内図



問い合わせ

・土木学会 全国大会委員会事務局 企画総務課
 TEL 03-3355-3442
 ・土木学会 平成23年度全国大会実行委員会事務局
 四国支部
 TEL 087-851-3315
 <全国大会ホームページ>
<http://www.jsce.or.jp/>